



〒892-0841
鹿兒島市照国町13-42
カトリック鹿兒島司教区
電話099 (226) 5100
振込口座 02030-2-8359
編集発行 教区広報部
1部60円年間千共1100円



マタイ福音書の理解を深めた大会

第二回聖書学校で子どもたちが学びと遊びで夏を満喫

第二回「夏休み子ども大会(聖書学校)」が八月三日(日)から五日(火)まで、カリタス幼稚園(鹿兒島市紫原三丁目)であった。全日程を通して泉浩二神父(鴨池教会主任)が新約聖書「マタイによる福音書」十三章1〜9節を教会訪問やミサなどで五回にわたり朗読し、参加した子どもたちはその度に、み言葉を味わいながら学習、理解を深めた。またプール遊び、バーベキュー、花火など、夏ならではのプログラムも組み込まれ、子どもたちは学びだけでなく遊びでも有意義な二日間を過ごした。

第一日

今年四つの小教区から十六人の子どもたちが参加。泉神父と出水教会の石田望神父(レデンブートル会)のほか、四人の青年会員がリーダーとして引率・指導した。

ザビエル教会に集合した子どもたちは小聖堂で諸注意を受け、泉神父によるマタイ福音書の朗読を聞いた後、教会訪問へ出発した。

訪問先の玉里教会では小限憲士神父から同教会の説明を受けた。その後、大会会場へ向かった。

目的の地カリタス幼稚園では三つに班分け。それぞれ「ペトロ・パウロ」、「マリアア(セブン)」、「ヨハネ」と子どもたち自らが命名。就寝前、あらためて泉神父によるマタイ福音書朗読に瞑目して耳を傾け、翌朝のミサと学習・作業に備えた。

第二日

午前六時起床。カリタス幼稚園に隣接する紫原教会へ。同教会信者や幼稚園のシスターらと共にミサにあずかった。侍者、第一朗読、奉納は「マリアア」の子どもたち。福音朗読でもマタイ十三章1〜9節が読まれた。朝食後は学習・作業。その



紫原教会で泉神父から説明を受ける子どもたち



平和は身近な所から始まる

ザビエル上陸記念祭で小川神父が説教

冒頭でもマタイ十三章1〜9節を朗読。「聞くたびに印象も異なり、心に残るものも違ってきたと思う」と泉神父。「み言葉を想い、学んだことを心がけることが大切」と説いた。そして子どもたちはそれぞれ繰り返し聞いたみ言葉から学んだことを文章や絵画で表現。またお祈りやみ言葉の

刷られた紙片にイラストを施すなどして装飾、これらをラミネート加工し学習の成果とした。昼食後は「ふれあいスポーツランド」のプールへ。そして夕食はバーベキュー、その後は花火を楽しんだ。

第三日

午前六時三十分起床。朝食・清掃後、五回目となる泉神父によるマタイ十三章1〜9節の朗読を瞑目して味わった子どもたちは、三日間の「子ども大会(聖書大会)」の感想文を綴った。感想文は絵を添えたもの、細かに日々を追ったもの、心の動きを綴ったもの、学年相応にさまざま。

八月十五日(金)恒例のザビエル上陸記念祭があった。今年の記念祭は、郡山司教がAYD(アジア・ユースデー・韓国)出席で不在だったこともあり、祇園之洲から福昌寺を經由してザビエル教会を目指して徒歩巡礼する「ザビエルウォーク」を中止し、教会での催しだけとなった。記念祭第一部として正午前から聖堂前広場で始められた「平和の鐘を鳴らそう」運動は、鹿兒島ユネスコ協

会と連合壮年会が協力して実施している世界平和を願うもの。田中弘允鹿兒島ユネスコ会長から運動の趣旨と平和の意義を学んだ後、田中会長と小川司教総代理が鐘楼の鐘を引いて教会の鐘を鳴らし、終戦を記念して各地で黙祷がささげられた鹿兒島市の空に平和を象徴する鐘の音を届けた。平和の鐘を鳴らそう後は、ザビエル教会主聖堂で聖フランシスコ・ザビエルの日本上陸を記念して「聖母被昇天」ミサがささげられた。

ミサで説教した小川司教総代理は「平和は、子どもが母親に見守られているときのような安心できる状態だ」と思う。そしてそのような小さく素朴なことから平和は始まって行くと感じる。今日ここに集まった私たちは、そんな平和を実現しようという決意を新たにしなければならぬ」とメッセージを送った。

ミサには約三百人の信者が集まり、十人の司祭たちと共に「ザビエルのもたらした福音が広がり、一日でも早く世界に平和が訪れるよう」祈りをささげた。ミサ後は教会ホールで茶話会が開かれ、大勢の信者や記念祭に足を運んだ人たちが交流するひと時が持たれた。

テーマは班制度の見直し 9月14日に教区評議会開催

郡山健次郎司教は、二年に一度実施される「教区評議会」を九月十四日(日)午後、ザビエル教会で開催することを発表し、各小教区に通達した。教区司教の諮問機関として位置づけられている教区評議会は、教区内各小教区及び準小教区の主任司祭と信徒代表各一人、教区司教、司教総代理、教区書記長、教区会計部長で構成される。また、議題の内容によっては、職務上司教が必要と認める者も召集される。今回のテーマは「班制度

の見直し」。「班制度は班集の中心ではなく、班地域の信徒の生活次元での交流を密にすることによって、小教区共同の連帯を促進する核ないし細胞である」と規程されている班制度をより宣教的に見直したいという意図から決められた。評議会は、午後一時(受付は十二時三十分から)に始められ、名瀬聖心教会で班制度をうまく活用している永山幸弘神父の講話を聞き、その後、質疑応答などで分かち合うことになっている。教区民が評議会の充実のために祈ることは当然求められるが、評議会出席者が持ち帰った内容をもとに、各小教区でどのように対応して行くべきか検討することが必要になる。



百周年記念誌」を発行した。徳之島で宣教が始められたのは一九〇一年、パリ外国宣教会のフェリエ神父によって。そして二〇〇一年に百周年を迎えた徳之島地区教会では、同年十一月記念式典を開催し、それまでの恩人たちに感謝の意を表した。

記念誌の発行はその頃から計画されていたが、諸事情で作業が進まず、予定より十年以上遅れて今回の完成となった。出来上がった記念誌はA四サイズで、徳之島地区にある教会のそれぞれの歴史が細かく記されている他、懐かしい時代の写真も掲載されている。

心にしみる愛を学んだ研修会

教区カトリック幼稚園教職員研修大会

感想文

昨年は、全国大会が鹿児島(城山観光ホテル)で開かれたため開催を見送っていた「鹿児島教区カトリック幼稚園教職員研修大会」が七月二十四日(木)、二十五日(金)の二日間、霧島市のホテルで開催された。今年の大大会には離島からの出席はなかったが、本土地区の十六の幼稚園から百三十二人の先生たちが集まり、研修し親睦を深めた。今年は、講師に「子育てシンガー」のmonさん(スターにしきのの姪)を福岡から招き、「生まれてきてくれてありがとう トーク&コンサート」が開催された。講師は自らの幼少時代の体験を話しながら、心に染み透る歌声、歌詞で先生たちの心を癒してくれた。出席者の感想を紹介したい。

川内聖母幼稚園

桃菌直子

今年も鹿児島教区カトリック幼稚園連盟の教職員研修大会が霧島で七月二十四日〜二十五日に行われました。昨年は全国大会が鹿児島であったため、二年ぶりのゆつくりとした時間の研修になりました。

今回は、福岡から子育てシンガーのmonさんを迎え、愛にあふれた歌とトークを聴くことができました。monさんは、在日韓国人であったため、差別を受け、また注意欠陥・多動障害であったことなどで、はじめを受け続け、友だちはひとりもいなく、幼い心



熱心に分かち合う先生たち

に「いじめられても仕方がない」とあきらめていたそうです。そんな中、一人の先生が彼女の持つ世界と一緒に楽しむ時間を持つことができました。まわりの子ども達も彼女に目を向けました。先生はイエス様と同じように、ありのままの彼女を温かく受け入れてくださったのです。その日からmonさんは、友だちと過ごす楽しさ、嬉しさを持ち、まわりの人へ関心を持つていきました。

神さまは、誰もが愛される存在であることを、私たちに教えてくださっています。子ども達は愛されることにより、今度は人を愛していく、そして神さまの心である「みんなが仲良くする」ことを教えてくれます。私たち教師は、神さまから預かった子どもたちを愛し、奉仕できるように努めていきたいと深く思いました。

この研修会は、日々忙しさの中にある私たちに、もう一度神さまの心を気づかせてくれたものでした。準備をしてくださった方々、ありがとうございました。また教区の皆さまのお祈りにより、たく

方々のお話を聞き、私は自分の母に会いたくなく、いつも近くで応援してくれている母。小さい頃は母と手を繋ぎ、祖母の看病に行つたのを覚えている。私の祖母は二歳の時に病気で倒れた。そのため私は祖母との思い出を一つも覚えていない。だが、小さかった私たちの子育てと看病をする母の姿から祖母のことを嫌いなことにはない。母から聞く話や祖母の寝ている姿から幼い私だったが愛おしさを感じたのを鮮明に覚えている。一人にひとつの尊い命。日々子どもた



第45回鹿児島教区カトリック幼稚園協会教師研修大会

さんのお恵みを得ることができましたことを感謝します。

ひまわり幼稚園

二宮史織

『生まれてきてくれてありがとう』というテーマでシンガーであるmonさんにご自身の生い立ちと経験からたくさんの感動と勇気を頂いた。両親、祖母、兄弟、子どもたち、monさんの周りにいらつしやる

鈴木神父のやさしい言葉

福音書を考える③



福音書というものが書かれた背景は、初代教会に与つたの一番の関心事は何であったのかを考えることにより自ずと明らかになります。それは、イエス様を信じる共同体としてこの信仰をどのように保つていくか、ということでした。このため弟子たちの体験を普遍化し、共同体としての記憶の維持・伝承のために定期的集まるのが最も重視されました。そこでは現在のミサの原形である「パ

ンを裂く式」が行われていたのです(使徒2・42、20・7、1コリント11・23、26)。また、これに伴いイエス様のあらゆることについて言語化する必要性が生じてきました。つまり、自分たちの信仰を確認する必要性、新しく仲間に入る人たちのためへの必要性和次の世代に信仰を伝えるための必要性が新たに生じたのです。これは自らの信仰の拠り所を明確にしなければならぬことを意味して

ちとかかわり、命の大切さを伝える保育者としてではなく、まずは一人の人として生きていくこと、周りの人に支えられていることに感謝し、丁寧に生きていくことができた。

頑張っています！神学生 貴島文弥(フィリピン)さん

この神学校の養成者たちも強調し、特に私たち最高学年の神学生たちに「喜び」を伝えるということを求め

ています。もちろん喜ばなくてはならないと思っても心からそうできることでもありません。でも、これまでの苦勞の中で祈り続けてきた実りだと思いますが、自分の中でこれまで義務でしかなかった教会の祈りやロザリオ、神の言葉とマリアさまの助けを少しづつですが、喜びをもって祈ることができるようになりました。これからそれを日常の



中で伝えられるようになりたいです。講義は司牧的なことと、後期に控えている試験に焦点が当てられていて、知性だけではなく心でも学んでいます。この学年の終わりに助祭叙階が控えています。ですが、まだまだやらずにはいけないことがたくさんある。今の段階ではまだそのことを考えることはできていません。これから色々と大変なこともありますが、この一年は特に皆さんの祈りが必要です。どうかお祈りください。

十字架の道行&日帰り黙想会

日時：10月26日(日)9時半ミサ〜16時
場所：マリア山荘
会費：1000円(昼食代含)
4月に完成したマリア山荘の「聖母の道行」を郡山司教の宿泊もで、遠方の方はご参加ください。連絡先☎0995(58)2994

なことです。なぜなら、「なぜ？」という疑問をもち、「なぜなら」という答えを求め、知的な好奇心が各福音記者の執筆意図に触れる機会となる可能性があるからです。

エウゼビオスは長老たちから学んだことがらを調べる理由として「なぜなら、書物」からの知識が「わたしの中で」生き続ける言葉ほどわたしにとって有益である、とは考えなかつたからである」と述べている(エウゼビオス『教会史』山本書店、一九八六年、一九八頁)。

来年の東京準管区との合併を前に 教区民と感謝の集い

レデンプートル会鹿児島準管区



喜びに溢れたミサとその後の祝賀会

レデンプートル会鹿児島準管区本部のある谷山教会(福崎英雄神父主任)では八月一日(金)、郡山健次郎司教ほか教区司祭をはじめ他小教区信者たちも迎え「感謝のミサと感謝の集い」を開いた。

これは長年にわたり鹿児島教区と同教会と北薩・南

薩地区教会、徳之島、沖永良部などでの司牧を担ってきたレデンプートル修道会が、同修道会創立者聖アルフォンソ(リゴリ)司教教会博士の記念日にあたり、同教会信者はもちろんのこと教区内すべての信者に感謝の意を表す催しで「アルフォンソ祭」の名で親しまれているもの。

今年の催しは特に、同修道会ミュンヘン管区から会員が鹿児島に派遣され司牧を開始して今年で六十年。加えて来年一月五日には同修道会鹿児島準管区と東京準管区とが合併し、「日本準管区」として再出発することとなっていることから、鹿児島教区での活動への理解と協力への感謝を表すため、より感慨深い催しとなった。

ミサを司式した郡山司教は同修道会の教区でのこれまでの宣教司牧に感謝を述べた上で、『神学院通信』第六号(二〇一四年七月、日本カトリック神学院発行)の神学生の日記に触れ、この日の福音朗読「収穫は多いが、働き手が少ない」(マタイ九・37)から、教会の衰退が叫ばれて久しい

が、それでも今年入学した神学生それぞれの召命への思いを読み、希望をもった。皆も希望を持ち続けて欲しい」と説教した。

また司教は今年七月に翻訳出版された教皇フランシスコの使徒的勧告「福音の喜び」を取り上げ、会衆に一読を勧めるとともに、特に教皇が述べる「新しい福音宣教」について言及。同勧告の論旨に沿

い、近年軽視されがちな信心行(ロザリオの祈り、聖体行列など)の重要性を示すとともに、信仰を失っている人や信仰に至っていない人を惹きつける「魅力ある教会づくり」を訴えた。

ミサ後の「感謝の集い」では司祭、シスター、信者の間で思い出話などの花が咲いた。福崎英雄主任司祭は「司教さまをはじめ、司祭の方々、信者や地域の皆さんに支えられてミュンヘン管区の準管区として鹿児島で今日まで宣教司牧にかかわることができたことを神さまに感謝しています」と謝辞。大野正博信徒代表は「八月に献堂五十年、今日は『感謝のミサと感謝の集い』と催しが続き教会が賑わって嬉しい。今後は管区との合併に伴い、鹿児

島・東京間の交流が盛んになることを願っている」と語った。

この喜びのミサと祝賀会には各地から百五十人余りの信者が駆けつけ、レデンプートル会員たちと喜びを分かち合った。(報告 諏訪勝郎神学生)

喜びに溢れたミサとその後の祝賀会

管区長が東京準

管区との合併について説明。「これまで通り。何も変わらない」と信者の不安を一掃した。また同修道会ヨルダン・ハンマ神父がレデンプートル会による鹿児島宣教の経緯を、池上聖行終身助祭が同修道会ミタマヤ神父との出会いと徳之島宣教について(代読)、川内教会の今給黎晶子さんが同修道会との思い出を語った。

管区との合併について説明。「これまで通り。何も変わらない」と信者の不安を一掃した。また同修道会ヨルダン・ハンマ神父がレデンプートル会による鹿児島宣教の経緯を、池上聖行終身助祭が同修道会ミタマヤ神父との出会いと徳之島宣教について(代読)、川内教会の今給黎晶子さんが同修道会との思い出を語った。

+KABAYAN SEKSIYON+
Isangtatlo: Pananampalataya sa Isang Diyos sa Tatlong Persona

Sa pagtuturo ng Simbahan ukol sa Isangtatlo, inilalarawan ang Diyos na binubuo ng tatlong persona-Ama, Anak, at Espiritu Santo. Lahat ng mga personang ito ay magkakapantay, magkakaisang diwa at magpasawalang hanggan. Sa kaisahan ng iisang Diyos, mayroong tatlong magkakabukod na mga persona, pawing magkakapantay sa kapangyarihan at kalikasan, at walang hanggan.

Sa Banal na Kasulatan, walang takot na ipinahayag ni Hesus, "Iisa kami: ako at ang Ama" (Jn 10:30). Nagsalita rin si Hesus ukol sa "Tagapagtanggol...ang Espiritu Santong ipadadala ng Ama sa ngalan ko" (Jn 14:26). Ipapahayo ni Hesus ang kanyang mga alagad para binyagan ang mga tao "sa ngalan ng Ama at ng Anak at ng Espiritu Santo" (Mt 28:19).

Hinihikayat tayong maging mapagpasalamat sapagkat bininyagan at nananalig tayo sa isang pananampalatayang batay sa isangtatlo. Pinahihintulutan ng Diyos na makabahagi tayo sa pag-ibig at dinamismo ng kanyang buhay. Ang Isangtatlo ay maaari ring maging isang modelo ng isang ulirang pamayanan ng tao, kung saan lahat ay nabubuklod sa pagmamahalan, sama-sama at magkaayong kumikilos tungo sa napagkasunduang layunin, at ang pagkakapantay-pantay at dignidad ng bawat tao ay binibigyang-halaga at iginagalang.

Katesismo sa "Taon ng Pananampalataya (Fr. Dino Orolfo)

種 潘

小学生の頃、隣家に住む祖母と話すのがとても好きでした。この祖母とのかかわりが、その後の私の生き方に大きな影響を及ぼしました。

誰に対しても、人として、その人と向き合い、その人を理解するために、その人が語るその言葉に、しっかりと耳を傾けて「聴くこと」を大切にしてください。

繰り返して、同じことを訪ねる度に「語られるその人に「ああ、その話はこの前も聞きましたよ」とは決して言いません。「そうですか」と、初めて聞く話のように、注意して耳を傾けます。

「父がフィリピンで大規模なジュート(黄麻)の栽培をしていて、使用人もいっぱい居て、幸せな時代でした」と戦前の話を、ご高齢の一人暮らしの女性から、私は何度聴いたことでしょうか。

敬老の日に寄せて

同僚の若いベトナム人の司祭たちが訪ねた折にも熱心に語りました。敬意を持って、亡き父とかかわってくれたこの司祭たちに、母はとても感謝しています。高齢者の誰もが、その人の生きた証を残したいのです。ですから高齢者の言葉に耳を傾けたいと思います。(玉里教会主任司祭・小隈憲士)

この女性にとつて、娘時代のご本人が一番輝いていたその時代の記憶は、彼女が「今を生きて」大きな支えとなっていることがよく分かります。

軽い認知症を患っているとは言え、ご聖体を持って訪ねて来る私に「生の充実」していた時代の思いを語ることは、「今を生きて」証となっているのでしよう。

最晩年の私の父もよく同じ事を繰り返して語っていました。

会と催し (9月)

- 1日(月) 川淵勇神父命日(一九九七年)
- 7日(日) 年間第二十三主日
- 8日(月) 聖マリアの誕生
- 14日(日) 七田和三郎神父命日(一九八九年)
- 15日(月) 十字架架揚
- 15日(月) 教区評議会・ザビエル教会・13時16時
- 15日(月) 司教座教会献堂記念日
- 15日(月) 司祭評議会・教区本部・14時
- 16日(火) 教区司祭会・教区本部・16時
- 16日(火) コンベンツス・教区本部・10時
- 21日(日) 年間第二十五主日
- 23日(火) ダニエル神父命日(二〇〇三年)
- 27日(土) バルビニ神父命日(二〇〇四年)
- 27日(土) メニヒ神父叙階記念(一九五九年)
- 27日(土) 宣教学校・ザビエル教会・13時30分
- 28日(日) 松永正男神父霊名(聖ピンセンチオ)年間第二十六主日
- 28日(日) 世界難民移住移動者の日
- 29日(月) 聖ミカエル 聖ガブリエル 聖ラファエル 天使
- ▼ティエン神父霊名(聖ガブリエル)

祈りの意向

- 【ノベナ】教区評議会(14日)が司祭と信徒の一体感を深める時となりますように。
- 【祈祷の使徒会】世界共通・精神障害者・貧しくされた人への奉仕
- 日本の教会・移住移動者

昨年からは始まった教会学校合同の聖書学校(子供大会)。今年は八月三日(日)から五日(火)まで紫原教会と隣接するカリタス幼稚園で開催された。十六人の参加ではあったが、昨年に引き続き参加した子どももおり、継続することによる霊的な体験の必要性を感じた。緊張した顔が笑顔いっぱい顔に変わる子どもたちもスタッフ一同もほっとさせられた。また紫原教会の信徒の皆さん、カリタス幼稚園のシスター、先生方には大変お世話になり、子どもたちの笑顔が何らかのメッセージを伝えたように思った。そして今回は青年、高校生の手伝いも大いに助かった。子どもたちの感想文を紹介したい。

楽しかった夏の思い出

「聖書学校に参加して」

私は、せいしよ学校に行くのがとてもふあんでした。でも行ってみるとみんなやさしくて、おもしろかったです。去年より人数は少ない十六人で、女の子は五人ほどびびりしました。

最後の日には、神父様が五回目の「マタイ十三章」を読みました。三日間がとても長く、短くなる時がありました。このせいしよ学校のことを家の人に話して、らい年はほかの話も聞きたいです。

(玉里教会 四年生 上田鈴音)

まずザビエル教会を出発し、玉里教会に行きました。お母さんがいたのでうれしかったです。つぎにカリタス幼稚園に行きました。するといざみ神父様が「マタイ十三章」を読みました。それはイエス様がたとえ話で、たねまきの話をしているところでした。グループ分けではしらないともだちもいたけど、すぐなかよくなりました。

私は、聖書学校に行く前はちよつと不安だったけど、行ってみたらとても楽しくて神様のことや教会のことがよく分かりました。私が楽しかった思い出に残ることは、花火とバーベキューとお出かけ(プール)です。友達もできてうれし

かったです。去年よりも楽しかったです。教会では、神父様がどの教会にもあるせいしよや聖体ランプを見せてくださいました。マタイ十三章(種まき)の話もしてくださいました。カリタス幼稚園でねる時はテントでねたりして、ふだんの時にはやらないようなこともしたりして楽しかったです。来年もこの聖書学校に来たいです。

(国分教会 五年生 別技春奈)

した。そのいのりのないよは、「じけんがない平和な世界でありますように」といのりました。

カリタス幼稚園についておにごっこをして遊んだり、グループわけをしました。そのグループの名前は「マリヤ7(セブン)」になりました。

二日目は、ミサをしました。た。「マリヤ7」がミサのとうばんだったのでもどきどきしました。その次にグループ名を書いた紙をラミネートして、食前と食後のいのりのカードもラミネートしました。次にプールに行ったり、バーベキューをしたり、花火をしたりしました。来年も出し物をがんばりたいです。

三日目は、最初にそうじをしました。そして感想文を書いて、ミサをしました。ミサは「パウロ・ペトロ」のグループがとうばんでした。

(鴨池教会 四年生 野添真生)

せいしよの言葉で心にとつた文は、「耳のあるものは聞きなさい」です。



課題にも一生懸命取り組みました



バーベキュー、おいしかったな!



プールでの水遊びも楽しかったよ!

池長潤大阪大司教が引退

後任に前田万葉広島司教

教皇フランシスコは八月二十日(水)正午(日本時間午後七時)をもって、大阪大司教区のレオ池長潤司教の定年による教区長辞任


願いを受理し、新しい大阪大司教にトマス・アクイナス前田万葉司教(現広島教区司教)を任命した。

ザビエル書院の窓

神の永遠の計画において、女性は愛の秩序が最初に根をおろすところです。

教皇ヨハネ・パウロ2世の
使徒的書簡
「女性の尊厳と使命」

訳者：初見まり子、松本三朗
ペトロ文庫 (定価750円+税)



問合せ
カトリック中央協議会 出版部
Tel.03-5632-4429

「短信」

▼スピリチュアル研修会
七月十九日(土)教区本部で臨床パストラル教育研究センター主催の「スピリチュアルケア研修会」が開催され、十人が出席した。出席者たちはレデンプトール会司祭ヴァルデマル・キッペス神父から「後回しにされた心の教育」についての講話で熱心に学習した。



短歌

閃光にこげし乙女ら歌いつつ召天されし思
いぞ深し
殉難の墓前に捧ぐ鹿の子ゆり二百十三華の
短き命に(長崎原爆の殉難乙女を悼む)
国分教会 市来 房枝

俳句

ゆるしの秘跡説く名譽司教のお言葉を想ひ
出しつつ祈り捧げぬ
純心学園 山頭 信子

丹精をこめて作りし数々の野菜賜ひし翁の
過ぎぬ
作り主逝きて間の無き菜園にいちごは熟し
梅雨の雨降る
鴨池教会 前田 儀子

梅雨明けや大空を切る飛行機雲
いが乗やころろ先行く老シスター
台風去りアキアカネ舞うテニスコート
夕闇の平和行進義のひかり
夕立ちや虹を呼んでる錦江湾
寝苦しい汗だくどくと夏が来る
鹿児島市 徳永ノブ子

鮮やかに視界の象ひろがりて白内障の術後
の日日よ
咳き込みて眠れぬ夜の窓を打つ激しき雨は
こころ突きくる
出水教会 遠竹 睦郎

追憶をたどりて祈る原爆忌
雲流れ人も流れる夏まつり
大輪の朝顔ミサを明るくし
朝早く青田見まもる影遠く
国分教会 政 ノブ子